

一瞬消えた一酸化炭素

・火山の噴煙で植物の活動が鈍る・・

昨年の冷夏と今年の記録的な猛暑 ヨロツバの洪水と異常気象が続いているが、地球の温暖化の力ぎを握っている「一酸化炭素」炭酸ガスの増加にも異変がでている。

地球がますます熱くなるという地球温暖化は、石炭や石油を燃やした時にでる「一酸化炭素」が空気中に増え、その「温室効果」で気温が上昇することである。このまま推移すれば「二千世紀末には地球全体の平均気温が三度前後上昇し、札幌が鹿児島の気候になると」の予測もある。

一酸化炭素は空気中に「一万分の四程度含まれて」この微量ガスが温室効果には絶大な役割を果たす。石炭石油の燃やす量の増加とともに「一酸化炭素」が敏感に増え続けて、連続観測が開始されて四十年ほどになるが毎年〇・四%の割合で順調に増えていた。ところが三年前から突然伸びが止まってしまった。それも日本やハワイなど北半球規模である。この間に石油石炭を燃やすのを止めてしまったわけではないので、空気中に放出された「一酸化炭素」がどこかに忽然と消えてしまったこととなる。海に吸収されたのだろうか。消えた「一酸化炭素」の行方のミステリーの鍵を握っているのが、三年前に大噴火をしたフィリピンのピナッボ火山であることは、研究者の間では一致している。

一つの有力なシナリオはこうである。ビナ

ツボ火山の大噴火で吹き上げられた噴煙が上空に漂い、太陽の光を遮る日傘効果で北半球が冷えた。気温に敏感な植物の活動が鈍り、呼吸などで「一酸化炭素」の量が減ってしまった。海への吸収はあまり変わらず、出の部分で減って石油石炭の燃焼から増える部分と相殺されて、合計で増加が止まつた。森林が寒むさで呼吸や活動を控えた結果というシナリオである。

ピナッボ火山噴火から三年。その影響は薄れて「休みした」「一酸化炭素」の増加が間もなく上昇に転じ、来世紀末の破局に向かってさらに増加が進むと予想されている。